

観性の建築

—心的トポロジーにより再生するかたちを共有するための形態—

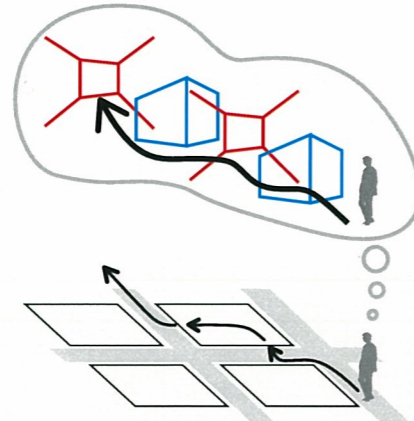


1. 利用者の感情により「再生する」

我々は、歴史ある地域の人々の営みが、空間性を持つ風景と共に連綿と繋がり、感情と共に存在していることを、多くの災害や、その復興を通して学んでいる。再生するかたちとは、利用者の形而上に位置する、時空を超えるものとする。本計画は建築を、設計者の理論のみでなく、利用者の理論からも構想することで、人の感情・空間と形態の関係性を探求し、再生するかたちをつくる提案を行う。

2. 建築の境界と心的トポロジー

日本建築は、風土に拠り曖昧な境界を築いた。その境界がつくる風景と図面(地図)で、利用者は、建築・都市を知覚し生活している。その知覚上優先されるのは、抽象化を経ず現前する風景であるが、現代の建築設計は主に、計算・体系化し易い図面が使用されて来たため、図面(地図)で表記できる単調な境界が多くなり、その結果、建築と都市の感情が、分断され易くなっている。そこで、利用者に自然発生する心的トポロジー(人が風景で感情の抑揚を得る心理位相幾何学)を設計に援用し、空間の境界の制御を試みる。利用者の感情の連続性を獲得することによって、建築の物理的な境界を超えた形而上の連続体として粘り強く繋がる再生するかたちを構想する。



＜再生するかたちをつくる心的トポロジー＞
設計者の図面による明確な境界で不連続な都市を、利用者の風景から得る心的トポロジーを考慮することで形而上の連続体にし、再生するかたちを得る。

3. 観性：歴史ある地域の固有性から類推する心的トポロジーを持つ形態の性質

風景による心的トポロジーを含む空間の性質を「観性」と名付けた。建築物は、その境界面の性質上、外観は開放感のある二点透視、内観は安定感のある一点透視の風景として、記述・知覚される傾向にある。しかし、特に都市には、図面(地図)の内外の区分と、構図や感情が同期しない様に感じる空間がある。このことは、図面(地図)で知覚する外部か内部かに拠るもの以上に、風景で知覚する二点透視や一点透視等の構図の方が、開放感や安定感等の感情に、より強く影響していることを示唆しているが、私はその原因は、消失点の数に拠る視線の誘引が、先天的・後天的な感情と結びつくことにあると推論する。本計画は、歴史ある地域から抽出した観性を得る要素を用いて形態生成し、利用者に心的トポロジーを意識付け、都市に再生するかたちを共有することを提案する。

